

道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和7年度 第1号

2025年9月30日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

令和7年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（1次調査）結果

函館水産試験調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2025年8月28日～9月1日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深100～600mの海域

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を下回った。
- ・ 魚群反応の比較的強い海域は、恵山沖及び登別沖。
- ・ 魚群反応の強い深度は、水深350～450mにかけて。
- ・ トロールにより漁獲されたスケトウダラのサイズは、尾叉長40～45cmの成魚の割合が高かったものの、尾叉長30cm台の未成魚もかなりみられた。
- ・ 水温は、渡島沖では水深100～230mにかけて、胆振沖では水深100～180mにかけては平年よりもやや高かった。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも渡島海域の189漁区（恵山沖）及び胆振海域の184漁区（登別沖）にやや強い魚群反応がみられました（図1・2）。
2. 渡島から胆振沖にかけての平均反応量は、前年同期を下回り、2023年度と同程度の値となりました（図3）。
3. スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、主に水深300m以深に観察されました。その中でも水深350～450mにかけて比較的強い反応がみられました（図2・4）。なお、渡島～胆振海域（C～H線にかけて）の水深200m付近にもやや強い魚群反応がみられましたが（図2の赤線で囲まれた範囲）、水中カメラで観察した結果、スケトウダラ成魚の反応ではなく、主に未成魚の反応と考えられます（成魚の反応は図2の緑線で囲まれた範囲）。
4. トロール調査を渡島沖（鹿部沖）及び胆振沖（登別沖）の水深400m前後で実施した結果、採集されたスケトウダラは渡島沖及び胆振沖ともに、尾叉長40～45cmの成魚の割合が高かったものの、尾叉長30cm台の未成魚とみられるサイズも比較的高い割合で含まれていました（図5；トロール地点は図1右上図参照）。
5. 調査海域の水温は、渡島沖（D線沖の観測点）では水深100～230mにかけて、胆振沖（H線沖の観測点）では水深100～180mにかけて、平年（2002年度以降の平均値）よりもやや高く（+1.0℃前後）になっていました。スケトウダラ成魚の生息に好適とされる5℃以下の水温は、胆振沖で水深200m以深、渡島沖で水深230m以深となっていました（図6；水温観測地点は図1右上図参照）。

なお、今回の資源調査の結果は、漁期始め（10～11月）の状態を予測するために実施しているものです。12月以降の状況は、11月中旬に実施する分布調査（2次調査）により予測する予定です。調査終了後に改めてスケトウダラニュースを発行して、来遊状況等をお知らせします。

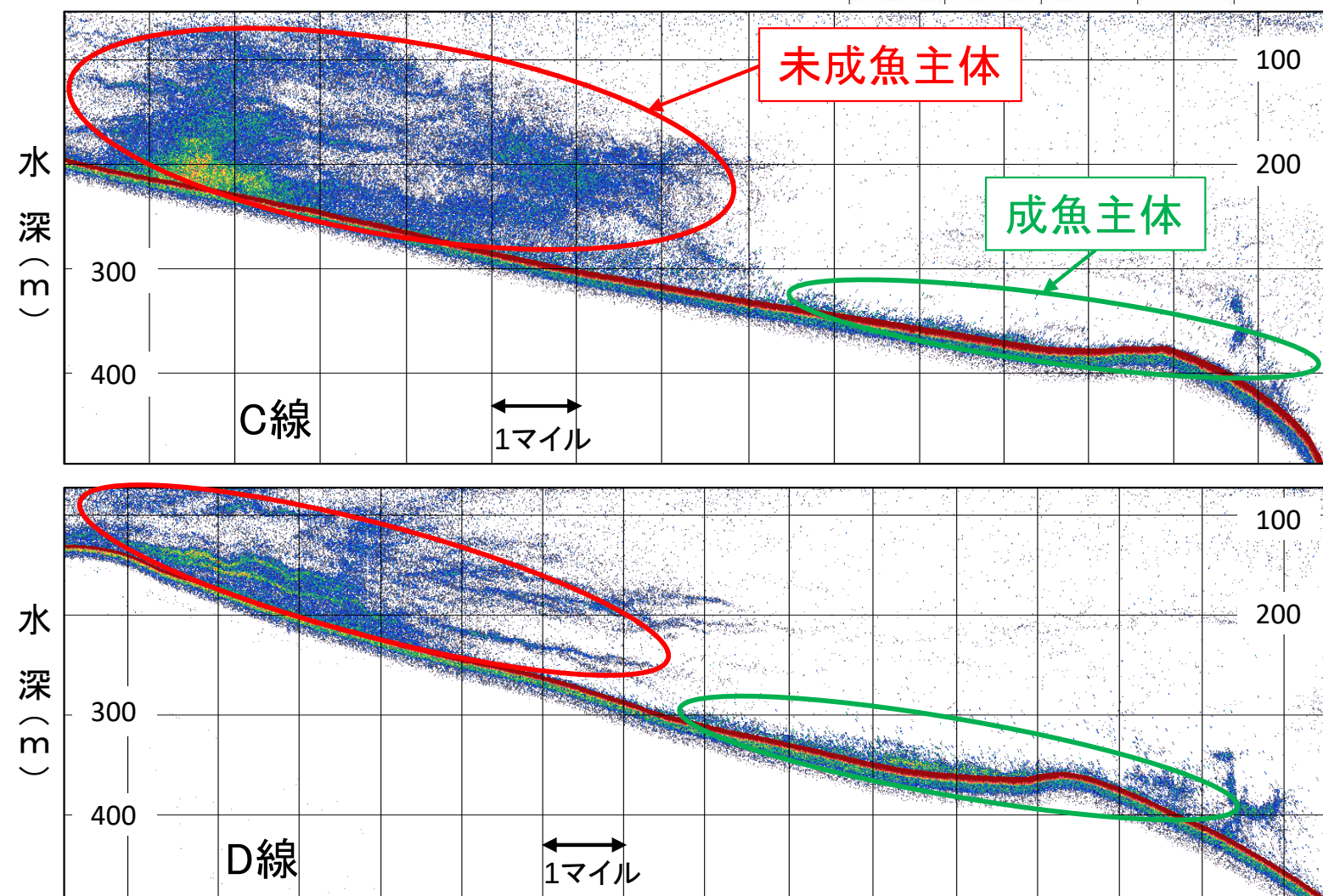
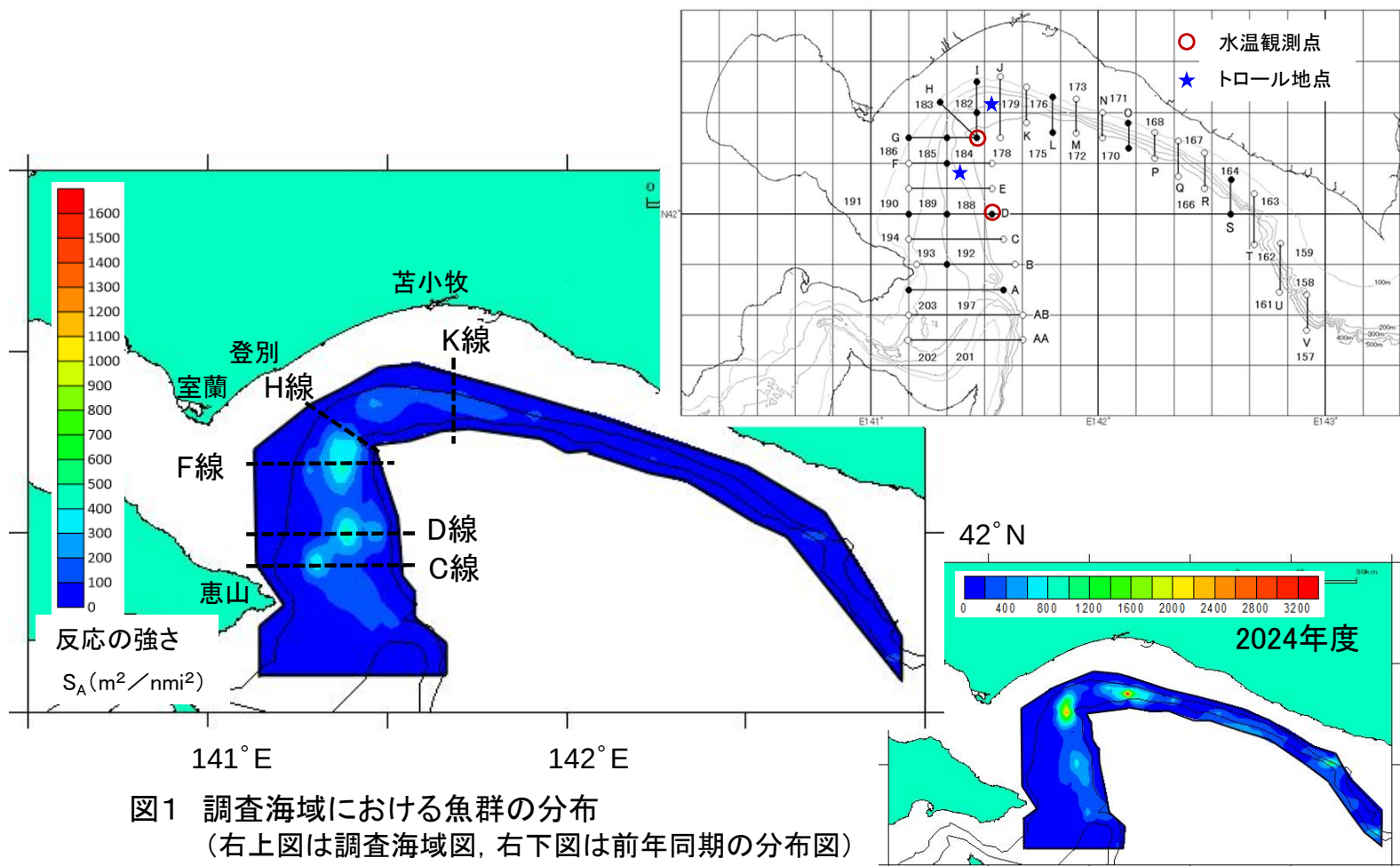


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)

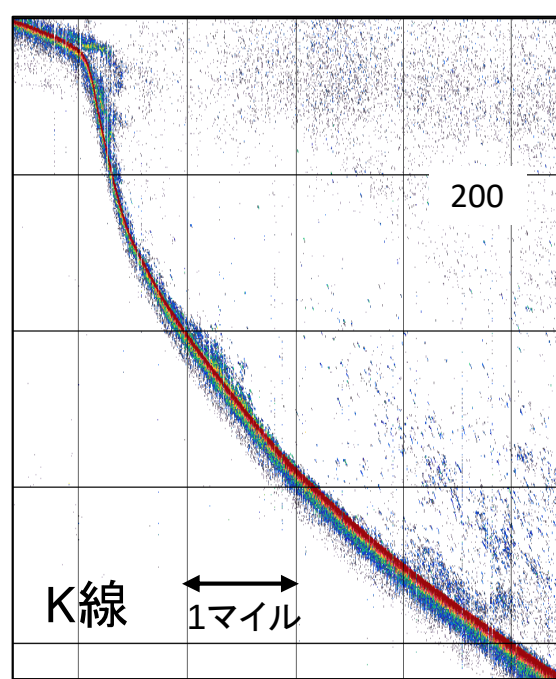
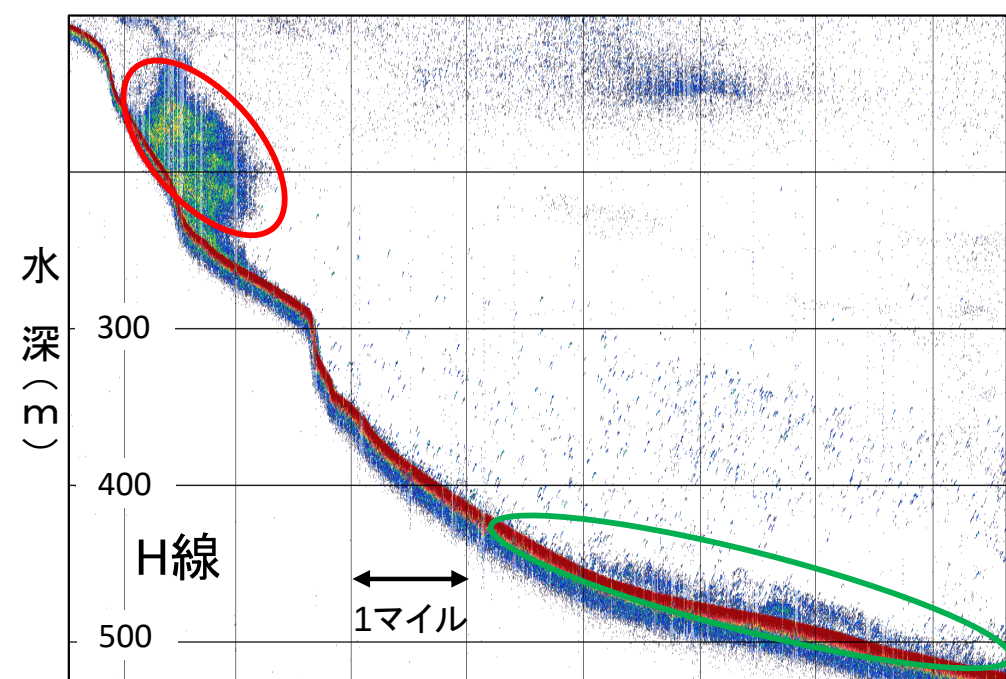
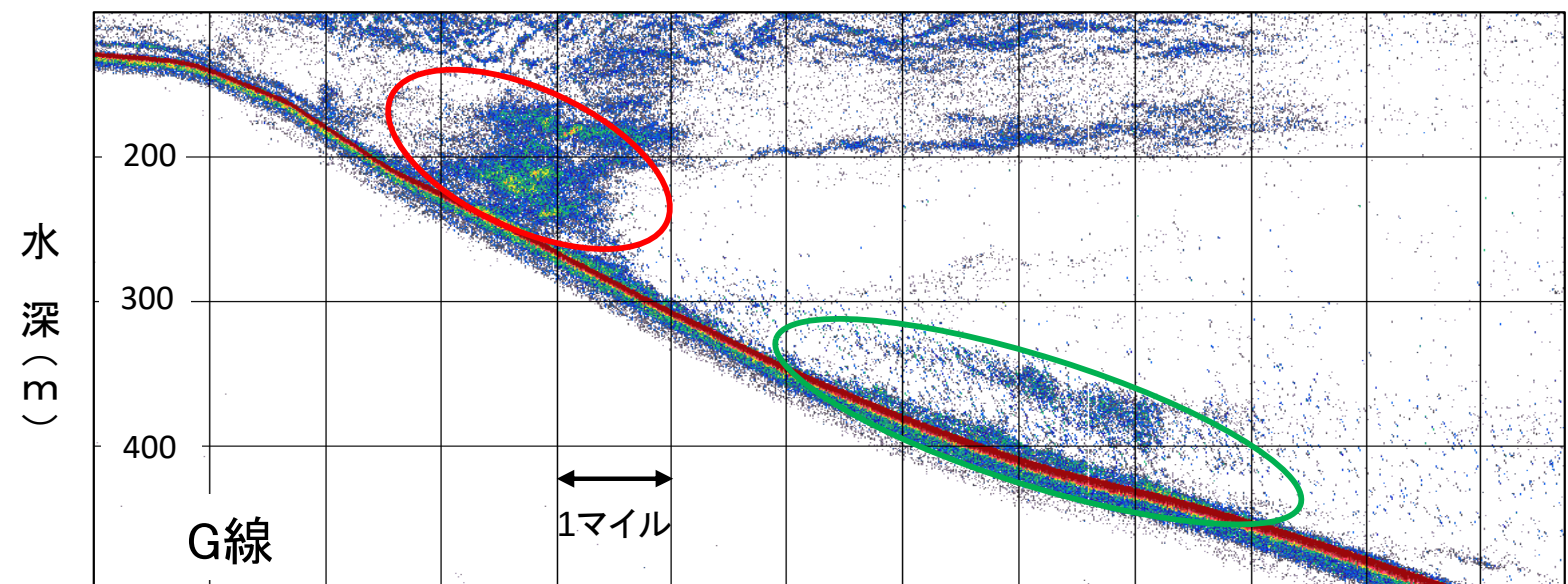


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

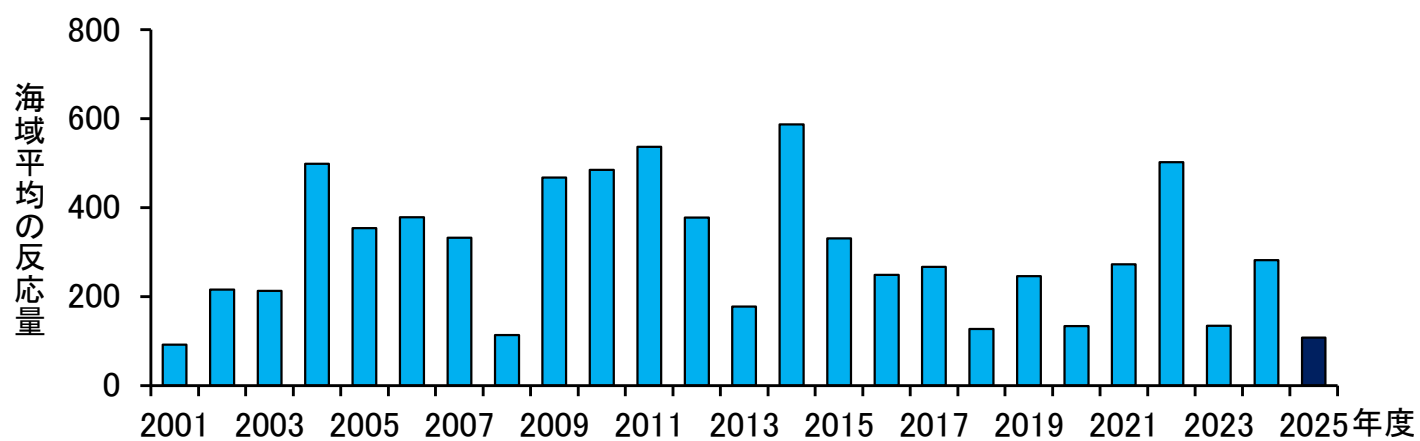


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移

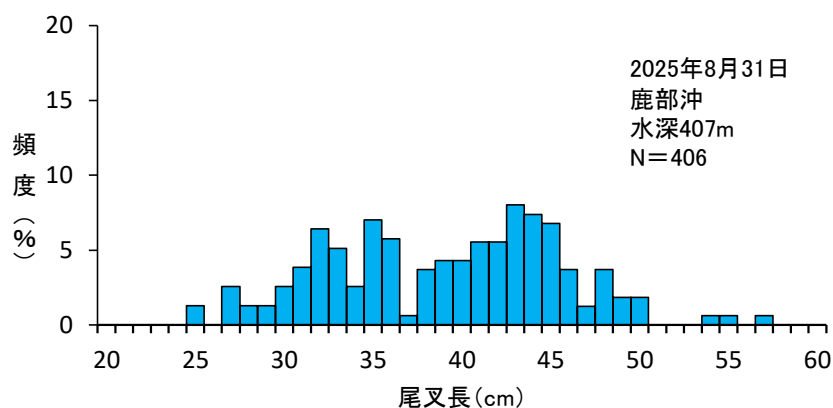
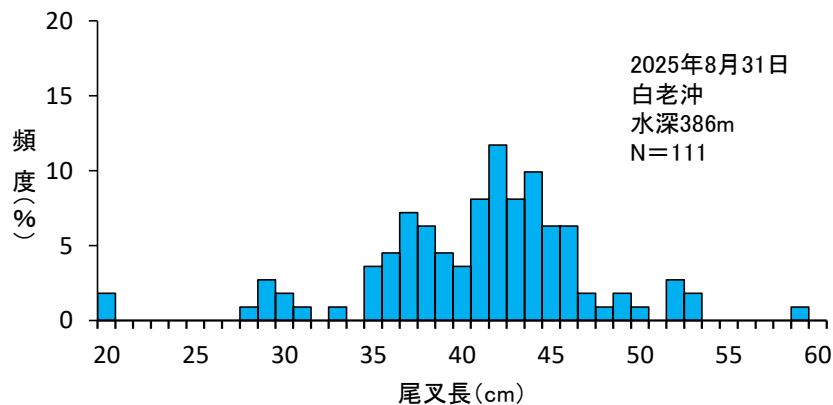
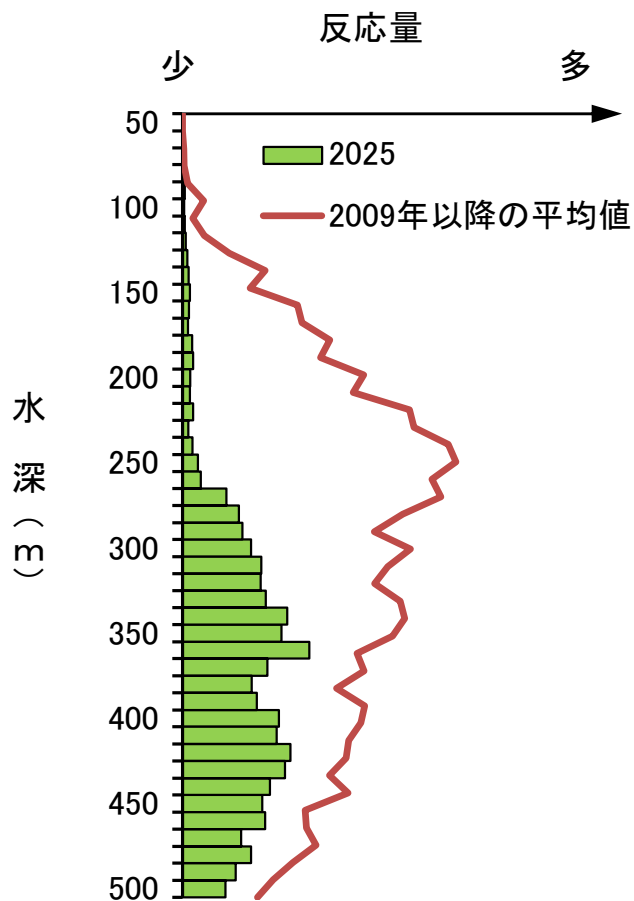


図4 水深別(10m間隔)の魚探反応量

図5 漁獲物の体長組成

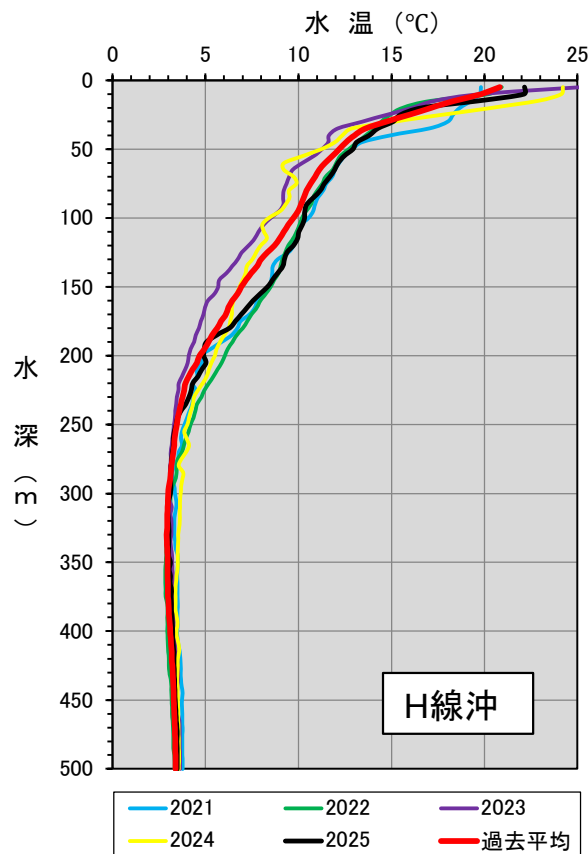
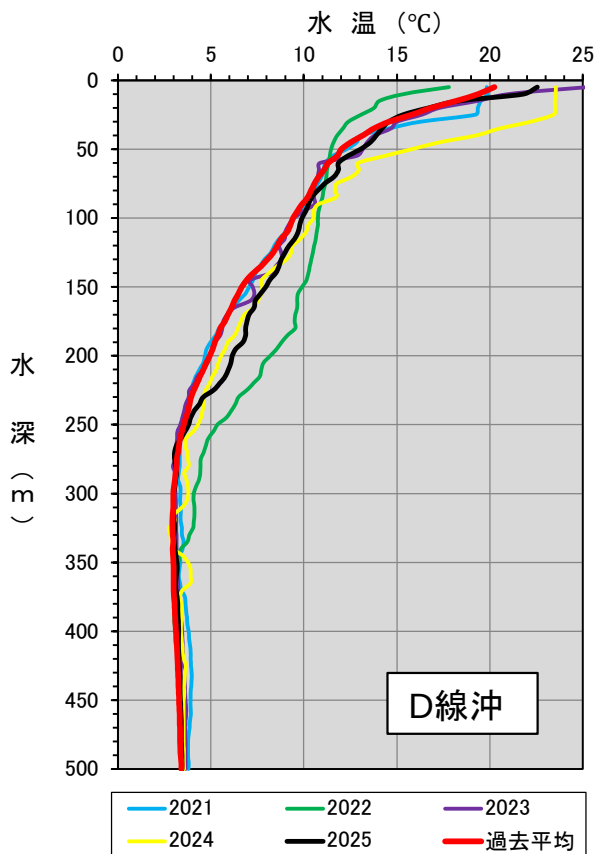


図6 8月下旬における水温の鉛直分布
左: 南茅部沖(D線上), 右: 登別沖(H線上)
(過去平均: 本調査における2002~2024年度の各調査点の平均値)

※この調査の一部は、水産資源調査・評価推進委託事業により実施しました。